

# C'n scene news

千葉市美術館ニュース「C'n」89号

## vol. 89 千葉市美術館 Chiba City Museum of Art

連載 館長のつれづれだより

特集1

オーバリン大学 アレン・メモリアル美術館所蔵  
メアリー・エインズワース浮世絵  
コレクション  
—初期浮世絵から北斎・広重まで

特集2

受託記念 所蔵作品展  
「ピーター・ドラッカー・コレクション  
水墨画名品展」

イベント報告

さや堂ナイトプログラム 水の祀り

美術館の仕事を紹介します  
「その3 海外への作品貸出」

〔編集・発行〕  
〒260-0013 千葉市中央区中央3-10-8  
TEL.043-221-2311 FAX.043-221-2316  
Chiba City Museum of Art  
3-10-8 Chuo, Chuo-ku, Chiba 260-0013, Japan  
http://www.ccma-net.jp/  
〔発行日〕2019年3月30日  
〔印刷〕株式会社 エイチケイ グラフィックス



歌川国政《岩井桑三郎の禿たより》大判錦絵 寛政8年(1796)頃

勝川春英《三代目瀬川菊之丞の油屋おそめ》大判錦絵 寛政8年(1796)



### 館長のつれづれだより アートがあなたに語りかける時

「老若男女」「千客万来」という語があります。先日、千葉市美術館で行われた「さや堂ナイトプログラム HIRUKO 水の祀り」では、まさに、この言葉のままの情景を、目の当たりにする感がありました。お子さんを連れのお母さん、お父さん、老齢の男女、日頃は美術館ではあまり姿を見ない多くの若者までが、美術館1階のさや堂ホールに一堂に会し、音と映像と舞踏による現代アートのパフォーマンスをゆっくりと楽しみ、マルシェもあるという素晴らしい場と時間をわたしたちは共有しました。

それは観るというのではなく、そこに参加するというのが、わたしの素直な感想です。

音楽が流れ、水をイメージする映像が会場を奔り、厳かに舞がはじまり、その表現が次第に激しく高揚してゆくと、それまで話し声もちろほら聞こえていた会場は、まさしく一点に集中し、参集する全てが一体となり静まりかえります。

とかく現代アートは、解らない、解り難いなどと言って、わたしを含め、特に高齢者

層は、現代美術展への来館を敬遠しがちになるのも確かです。ところが、驚くことに美術館で働く職員のなかにも、現代美術の展覧会をしても人が入らないなどと、つい言葉に出してしまう人もいなくはないのです。しかし、考えてみましょう。そもそも美術、芸術の鑑賞というのは、それに接する人の感性の問題です。ですから、江戸時代以前の、明治や大正時代の美術が嫌いだという美術愛好者がいるように、現代アートが嫌いという人がいても当然です。しかし、わたしは考えます。この現代に生きるわたしたちと同じ時代に、活発な活動を展開する現代アートが、現代人であるわたしたちに解らないということはないと思います。

わたしは高校生の時代に、西本順先生（東京芸術大学教授）から芸術理論の極初歩を学びましたが、先生は、わたしたちに「思惟しちゃいけない。直観だ」と、芸術に接するということを解り易く説かれました。いま先生のこの言葉が思いだされます。これをわたしなりに、かなり粗っぽく言って

しまえば、現代アートは、観るのではなく、その空間に参加するということではないでしょうか。いわゆる古美術の場合でも、本来違いはないのです。しかつめらしい顔をして、静寂のなかで静かに作品を見ても、その作品は、あなたに何も語ってくれないでしょう。

人の最も純粋で素朴な歓びの表現は、その感動を声に出し、相手がいればその人に、もし誰もいないとしても、一人声をだしてその感情を表現するでしょう。多少そこに雑音があったとしても、その空間に同化していれば、アートは確実にあなたに語り掛け、感動を呼び起こし、あなたは鑑賞の歓びを得るに違いないと思います。そのことに今回改めて気付かされました。美術を、あるいはアートを鑑賞するということは、観るのではなくその空間に参加し

その空間を他人と共有することではないでしょうか。これには古美術でも現代美術でもその接し方に違いはありません。千葉市美術館は、これからも、古美術も現代アートも同じ様に企画に工夫を凝らし力をいれ、ご来館くださるみなさんにご満足いただける魅力的な展覧会の開催に努力してまいります。変わらないご支援のほどよろしくお願い申し上げます。

〔館長 河合正朝〕



2月16日 さや堂ナイトプログラム パフォーマンスに参加する観客の様子



## UKIYO-E PRINTS FROM THE MARY AINSWORTH COLLECTION

ALLEN MEMORIAL ART MUSEUM, OBERLIN COLLEGE

オーバリン大学 アレン・メモリアル美術館所蔵

# メアリー・エインズワース浮世絵コレクション —— 初期浮世絵から北斎・広重まで

……私の心は、月曜日に町を出て、シアトルから横浜に向かう6月7日からのダコタ号の船旅のこと  
でいっぱいなのです。自分がこの6年間何をして、  
何を考えていたのかさえ思い出せません。 ……

これは、今回展示する浮世絵を収集したメアリー・エインズワース(1867-1950)が、オーバリン大学で一緒にあった同窓生に宛てた1906年の手紙の一節です。短い文の中にも、日本に旅立つ前の期待に満ちた感じが伝わります。そして当時39歳のメアリーは、手紙の通りに、この年(明治39年)日本へと旅立ちました。

残念ながら旅の詳細はわからないのですが、前年に日露戦争があり、急速に西洋化が進む日本でしたから、その変化を感じることも多かったことでしょう。浮世絵版画でいえば、日露戦争を主題にするなど、社会的・政治的な作品が多く出ていた時代です。しかしメアリーは、それには目もくれず、江戸時代の浮世絵に心を寄せました。

石川豊信(1711-85)の《提灯と傘を持つ佐野川市松》(図1)は、メアリーが日本で初めて購入した作品だと伝えられています。延享・寛延期(1744-51)頃の作品で、墨摺の版画に筆で彩色をした初期浮世絵の名品の一つです。浮世絵収集家の中でも、最初に初期浮世絵からコレクションを始めるというのは珍しいことです。優美でプリミティブな魅力のこの版画を通して、彼女にとっての理想の日本——江戸の面影を見ていたのではないのでしょうか。

1500点余にものぼる彼女のコレクションでは、葛飾北斎(1760-1849)や歌川広重(1797-1858)の作品も充実しています【図2、3】。特に広重の作品は多く、このうちの800点ほどにもなります。広重没後から50年も経っていない時ですから、まだ集め易かったという

ことはあるでしょうが、独自の視点により個性的な表現をする北斎の風景画にくらべて、土地ごとの情趣を描き出そうとしていた広重の作品は、やはり失われようとする江戸情緒、日本の原風景として、メアリーの心に訴えるところがあったのかもかもしれません。

一方、メアリーのコレクションは、浮世絵を体系的に収集しており、その歴史をたどることができる点にも特徴があります。これらのコレクションは、メアリーが亡くなった後にオーバリン大学に寄贈されたのですが、ただ自分の好きな浮世絵を集めただけではない、教育的な視点は、現在でも大学にとって非常に有効な教材となっています。それはオーバリン大学の校風とも関連しているのでしょう。

1835年(北斎や広重の風景画がヒットした頃)の設立以来、オーバリン大学は、アジアを含めた世界の国々や人種に広い視野と寛容さを持続してきました。1835年にアフリカ系アメリカ人の入学を許可したアメリカ合衆国で最初の大学の一つであり、1837年には、正規の学生として女性の入学を認めた最初の大学であったそうです。

さらにこの大学で学んだメアリーは、型にはまらない、勝気な性格であったそうで、まだまだ米国から日本への女性の旅行は稀なことであったと想像しますが、彼女を知っている人であれば、大海原を越えて日本を旅行し、その後浮世絵の収集を続けたことも、さほど驚きではなかっただろうと、アレン・メモリアル美術館の学芸員ケビン・グリーンウッドさんは想像しています。

オーバリン大学は、シカゴから東へ500キロほど、オハイオ州に位置しています。アメリカの中では思いがけないほど、安全で静かな町で、大学を中心にした町は、文化意識も高く感じられます。アレン・メモリアル美術館は、その恵まれた環境の中にある

## MARY AINSWORTH

メアリー・エインズワースって  
こんな人!



メアリー・A・エインズワース  
Photo Courtesy of the Oberlin College Archives

裕福な実業家の家庭に生まれたメアリー・A・エインズワース(1867-1950)は18歳で当時からリベラルな校風で知られる芸術大学、オーバリン大学に入学します。1837年に女性に門戸を開き、世界で初めて共学となったオーバリンで充実した学生時代を過ごし、1889年芸術学学士を修了しました。

メアリー、日本へ旅立つ! —浮世絵との出会い

自立心の強い女性に育ったメアリーは1906年、遠く日本へと旅します。この旅の中で出会った初期浮世絵の素朴な美しさに感動したことをきっかけに浮世絵の収集を始めました。

情熱的で意志の強い性格だったメアリーはアメリカに帰ってからも着実に収集を続け、目利きの女性コレクターとしてオークションでも一目置かれる存在でした。



イラスト:さいとうみほこ

### 家族とメアリー

浮世絵だけではなく、実生活でも一風変わったこだわりの持ち主であったメアリー。なかでも専属のお針子に縫わせた特製ベチコートは親族たちの語り草で、足のあたりのポケットに小銭をしまっていたのだから。

親戚の子供たちをアイスクリームや映画に連れていくとき、お金を払う際にスカートを持ち上げるので驚かれましたが、姪や甥たちには楽しい思い出となりました。

生涯独身だったメアリーですが、兄や従妹、その子供たちと過ごす時間を大切に、集めた浮世絵を見せて解説することもありました。

親戚との晩餐の席で「私、これ好きじゃない」と文句を言う子供に「好きになる必要はないの。あなたがすべきことはひとつ、それを食べることよ」と言い放ったというエピソードなど、個性的な人柄を伝えるエピソードには事欠きません。

### メアリー・エインズワースコレクション

1950年、83歳で天に召されたメアリー。彼女の収集品は生前親交の厚かったコレクターによって整理され、彼女の愛した母校・オーバリン大学に一括寄贈されました。1500枚を超える浮世絵版画は彼女の名を冠したコレクションとして現在も当地で愛されています。

### 所蔵作品展

### 受託記念

## ピーター・ドラッカー・コレクション水墨画名品展

Masterpieces from the Sansō Collection:  
Japanese Paintings collected by Peter F. and Doris Drucker



「ドラッカー・コレクション珠玉の水墨画」展覧会チラシ  
2015年 千葉市美術館

2015年春、千葉市美術館では「ドラッカー・コレクション珠玉の水墨画 —「マネジメントの父」が愛した日本の美—」を企画し、長野県信濃美術館、山口県立美術館という巡回先の美術館と協同して開催しました。日本で特に絶大な信頼を得てきた経営学者ピーター・ドラッカー(1909-2005)の、アメリカ・カリフォルニア州のクレアモントの自宅に保管されてきたコレクションから、111点を借用した展覧でした。ドラッカーの没後10年という年であり、展覧会はこの個性的なコレクションを築いたドラッカーの収集の道筋や美術を通じた日本への考察、思想についても踏み込んだ内容としたため、これまで古美術展や美術館に馴染みが薄かった方々からも高く篤い関心が寄せられたものとなりました。会場に掲げたドラッカーの言葉を熱心に書き留める、あるいは一幅の絵を展示ケースのやや遠目から立ち尽くすように眺め入るスーツ姿、日頃展示室内ではあまりお見かけしない活躍世代のビジネスマンが連れ立つ姿も印象に残っています。

そのドラッカー・コレクションの全197点が、その後日本の企業によって取得され、昨年度、千葉市美術館に寄託されました。ドラッカー夫妻は生前より、自分たちの没後は作品群を手放してよいと準備されていたようですが、夫妻が30年以上にわたって熟慮のうえ収集し、自宅で日々楽しみ学んできた作品の

全てが散逸することなく日本に戻ってきたこと、さらに、公立美術館のもとに保存・管理が委ねられ、長期的な視点で調査研究や展示などに供され活用できる運びとなったことは、大変有り難く喜ばしいことです。私個人的にも、2013年に初めて展覧会の交渉と調査のためクレアモントに赴いた頃から思えば、この成行きには感慨深いものがあります。

本展は、この寄託を記念し披露目のために開催するものです。若きドラッカーが1930年代のロンドンで出会い「恋に落ちた」日本美術とは——。大戦中の狂気の世界にあって、「正気を取り戻し、世界への視野を正すために日本美術を見る」と言っていたドラッカー。高度成長期の日本に毎年のように招聘されるたびに熱心に作品を見て収集したドラッカーが最も好んだのは日本の水墨山水画でした。稀少な室町時代の水墨画を最大の特色とするこのコレクションの真髓を、あらためてご覧いただきます。

折しもアメリカの女性が愛した浮世絵コレクションの初里帰りとなる特別展と好対照を為す機会であり、ドラッカーが何に集中したのかがよくわかるものになるかと思います。展示規模は少しコンパクトになりますが、前回の展覧会を見逃した方は今回は是非、そうでない方もあらためて是非、お楽しみいただけますよう、その後判明した新しい資料も交えて展示を構成いたします。どうぞご期待ください。

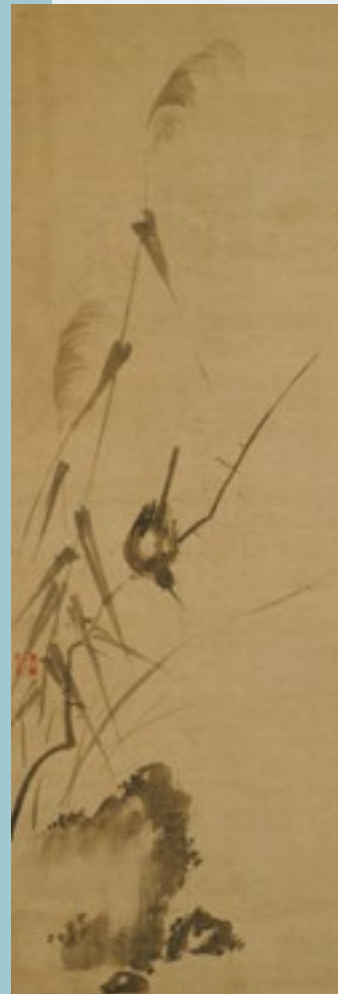
【上席学芸員 松尾知子】



【図2】歌川広重《東海道五十三次之内 日本橋 朝之景》大判錦絵 天保5年(1834)頃



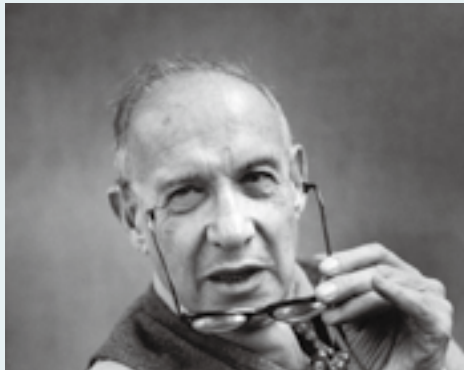
【図3】葛飾北斎《富嶽三十六景 山下白雨》大判錦絵 天保2-4年(1831-33)頃



知有《翡翠図》室町時代  
旧ドラッカー・コレクション(当館寄託)



雪村周継《月夜独酌図》室町時代 旧ドラッカー・コレクション(当館寄託)



ピーター・F・ドラッカー



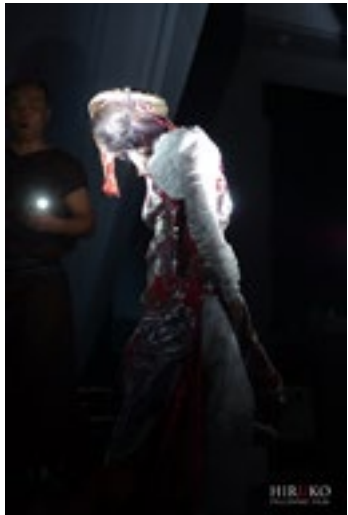
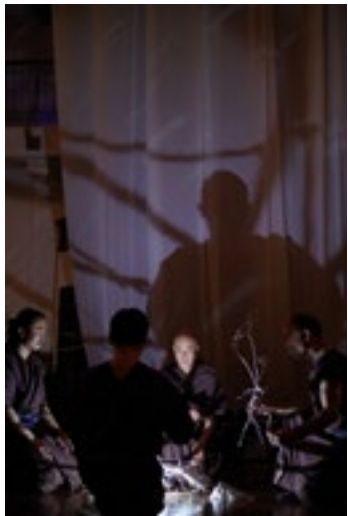


photo by Nagare Tanaka



photo by Hiroyasu Daido

さや堂ナイトプログラム  
「HIRUKO 水の祀り」  
映像作家 飯田将茂×舞踏家 最上和子  
2019年2月16日(土)  
開場16:30 パフォーマンス18:00～  
美術館1階さや堂ホールにて



パフォーマンスの様子

H I R U K O 上 映 プ レ イ ベ ン ト

# 水 HIRUKOの 祀り

千葉市美術館 1 階のクラシカルな空間。昭和 2 年に建設された旧川崎銀行千葉支店の建物を復元保存した「さや堂ホール」にて、映像と舞踏が融合・共鳴するライブパフォーマンスイベントを開催しました。飯田将茂によるドーム映像作品《HIRUKO》から切り出された映像空間と、最上和子率いる舞踏家たちによる儀礼の舞。祀りのフィナーレは、舞踏の舞手だけでなく、観客やスタッフを含め、その場を共有する全ての人々が担い手となって作りあげられました。

さや堂ナイトプログラムには、舞台となる美術館建築の、普段とは異なる表情を発見してもらいたいという期待も込められています。3 回目となる今回、マルシェを楽しむ和やかな雰囲気から一転、パフォーマンスが始まるとともに、さや堂ホールが今までに見たことのない、荘厳な空間へと変化する瞬間を目撃できたように思います。

また、厳かで凛としたパフォーマンスに見入りつつ、同時に私が想像を巡らせていたのは、舞台のこちら側、つまり鑑賞者側の視点でした。私の隣で、あるいは向こう側の座席から、演者を見上げる視線の先には、一体何があったのでしょうか。立ち位置だけでなく、身長や目の位置といった身体的な違い、あるいは経験や価値観の違いからも、その時その場で見えている光景は、各々に異なっているかもしれません。パフォーマンスに限らず、あるいは日常の風景や出来事であっても、時間や場所を共にしながら、私たちはそれぞれに異なる「今」を生きているのだとしたら。そんなことを考えながら、改めて自身の身体が存在にも気付かされました。

今、ここでしか出会えない瞬間に立ち会えたことを、あの時、あの場所を共にしていただいたすべての方々に、改めて感謝したいと思います。

[学芸員 畑井恵]

## 飯田 将茂

映像作家。玉川大学芸術学部非常勤講師。国内外のプラネタリウムで身体性をテーマとした独自のアプローチによってドーム映像作品の発表を続ける。国外の主要なドーム映像祭にて、日本人初の最優秀賞を受賞。

## 最上 和子

原初舞踏家。バルハラ稽古場主宰。原初舞踏を提唱し「身体」の探求と模索を続ける。公演・ワークショップ・東京巡礼などの活動をする一方で実践家の立場からの身体論を構築。執筆も手掛ける。



会場のさや堂ホールとマルシェの様子

## 美術館の仕事を 紹介します！

その  
3

### 海外への作品貸出

千葉市美術館では年に2～3件のペースで海外への作品貸出にも対応しています。国内への作品貸出とフローは基本的に同じで、「安全に展示ができる施設か?」「出品する意義のある展覧会か?」「希望されている作品の状態は貸出しに耐えられるか?」等を事前に書類等で検討し、クリアできると判断できれば貸出を承諾します。やや特殊なのは、点数が20点以上を超えるような大規模な貸出の場合、もしくは設営や組立に立会いが必要な場合、学芸員が現地まで同行する「クーリエ」を務めることです。

私自身、一昨年はイタリア、昨年はロシアへの作品輸送に随行し、クーリエを経験しました。美術品の輸送は、まず自館での

コンディションチェックに始まります。一つ一つの作品の状態を書面にまとめた調査を作成し、これを元に作品が千葉市美に帰ってくるまで異常がないよう努めるのがクーリエの最も大事な役目です。輸出の場合は長距離輸送用の木箱に作品を収め、成田空港までトラックで輸送し、積み込みまで立ち会います。そして作品と同じ飛行機で現地に飛び、現地の空港からの陸上輸送にも同乗します。その過程で発生する温湿度の変化、振動を可能な限り防ぎ、安全を確保するため、特に箱の積み下ろしや展示の際には非常に神経を使いながら作業を行います。よく「仕事で海外旅行ができて楽しいでしょう」と言われますが、基本的には全責任を自分1人で

負っており、1週間～10日間遠い異国で不自由な英語を駆使し、常に緊張して仕事にあたりますので、作品が安全に展示され、ケースに収まって初めてホッとできる、中々にハードな道のりです。唯一絶対の役得は、現地で展覧会場を実際に歩き、海外のお客様が自館の作品を含む日本の古美術に興味を持ち、鑑賞を楽しんでいる様子を、自分の目で見られる、ということに尽きるのではないのでしょうか。私がクーリエとして関わった2つの展覧会 ― 昨年にローマで行われた葛飾北斎展と、昨年モスクワのプーシキン美術館で行った日本美術名品展 ― にはそれぞれ7万人、12万人を超える来館があり、大きな反響を呼びました。遠い外国の美術

館に、自館の作品が並んでいるのを見るのは、ちょっと特殊な参観日のような不思議な感じですし、輸出までの手続きや苦勞が思い出されて殊更に感慨深いものです。

2019年は、米国・ワシントンのナショナルギャラリーで開催される「日本美術における動物の姿」展に当館の松尾学芸員が共同キュレーターとして参加し、現場の展示などにも立ち会います。当館の作品も現地で活躍する予定です。どうぞご期待ください!

[学芸員 松岡まり江]



ロシア・プーシキン美術館「日本美術名品展」でも大人気の当館作品、鳥文斎栄之《三福神吉原通い図巻》(画面中央)